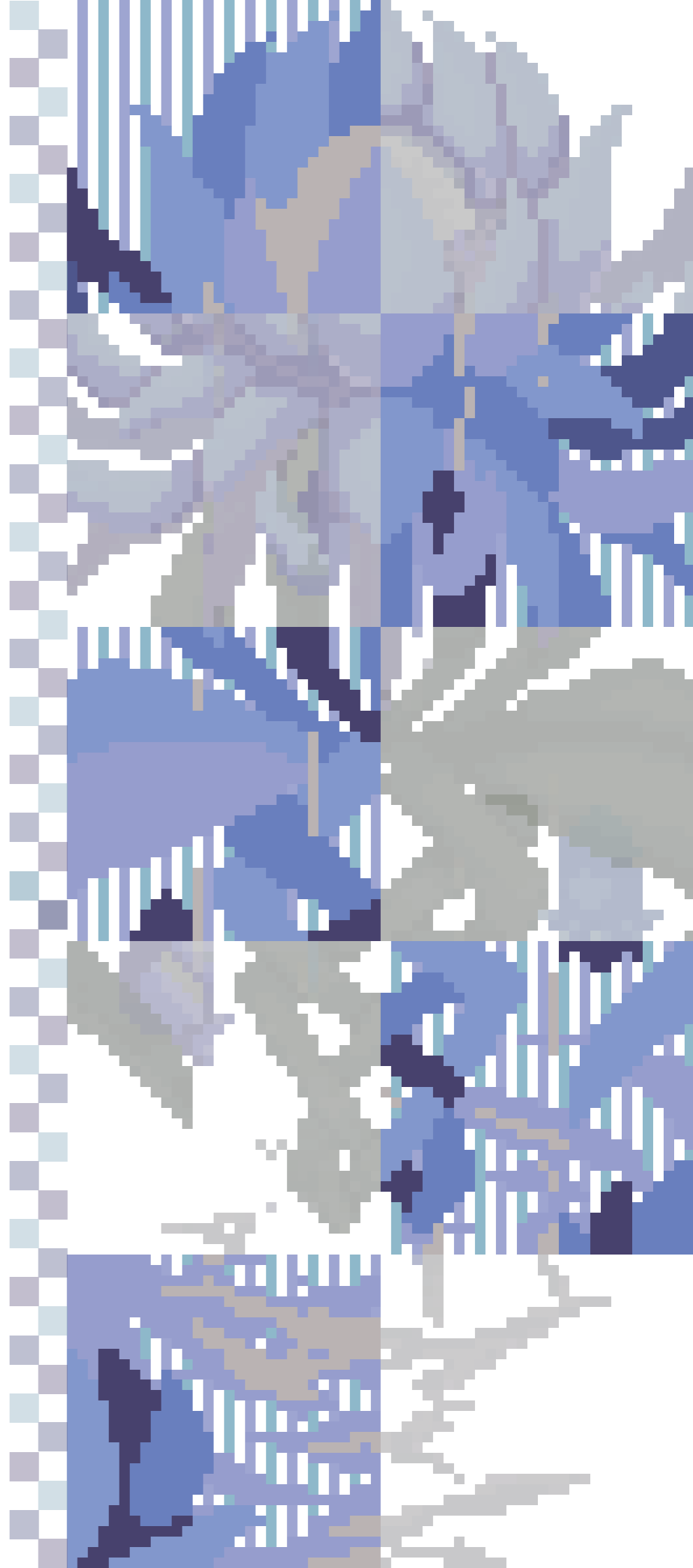


2024 卒業制作

「織りによる平面 / 立体的表現の融合」

鏡花水月

プロダクトデザイン学科 テキスタイルコース
品田 春香



■ 制作のきっかけ

「織物」とは、経糸と緯糸を交差させて織ることのできた布地のことです。

タペストリーにして観賞したり、布として製品に加工したり……。

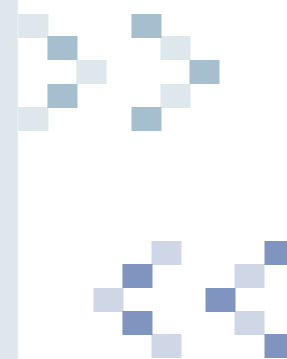
「織物」の新たな見方・楽しみ方を見つけ、より多くの人に興味を持ってもらいたい。

そんな思いで、私が好きな「ドット絵」と掛け合わせてみました。

■ 制作テーマ 『つづれ織り × ドット絵』

立体的な描写 『つづれ織』

- ・ 緯糸のみで図柄を織り出す手法。
- ・ 糸の太さ・種類による違いを活かせる。
- ・ 手作業の温かみも感じられる。



平面的な描写 『ドット絵』

- ・ 点の集まりで絵を描き出す手法。
- ・ 単純ゆえに奥が深く、独特な雰囲気がある。
- ・ 機械的な無機質さも感じられる。

対照的な要素を組み合わせ、両方の良さや面白さを持った作品を制作

→ 独特な世界観を持つ作品を配置することによる空間演出



「つづれ織とドット絵を掛け合わせたインスタレーション」の制作

■ 制作の流れ

1. イラスト作成

元になるイラスト＝織の設計図をドットで描きます。

「幻想的な非現実感」を大きなテーマとし、水と花をモチーフに作成しました。

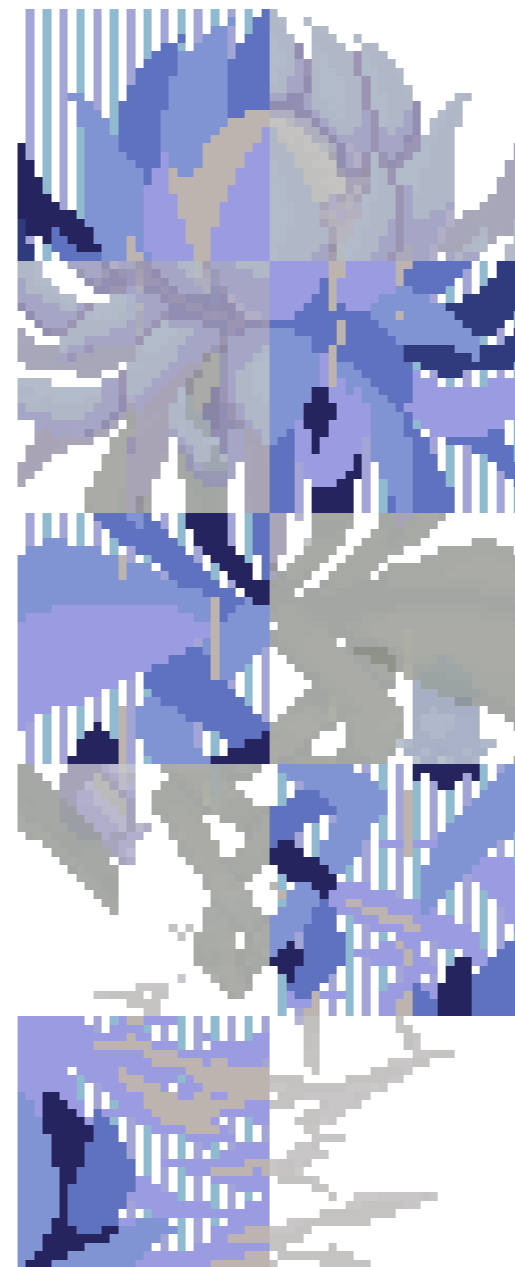
粗過ぎず細か過ぎず、かつ糸で織ることを考慮し、1つのドットは1cm角に。

ドット絵の特徴である「色数制限」を活かすため、色数が多い / 少ないの2種類を用意。

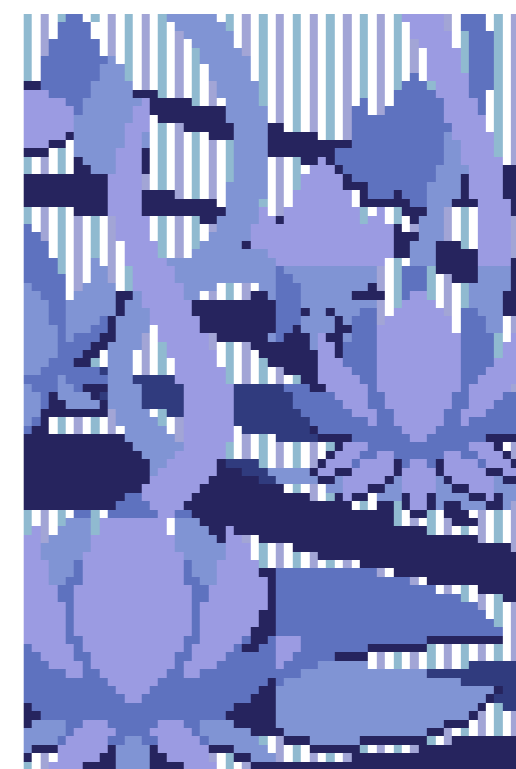
雰囲気の違いを比較しながら楽しめるよう、後程分割して交互に再配置します。



◀ 色数多め
15色 ver.



◀ 色数少なめ
5色 ver.



2. 糸選び / 染色

元絵から色を抽出し、それぞれ使う糸の種類・太さを決めます。

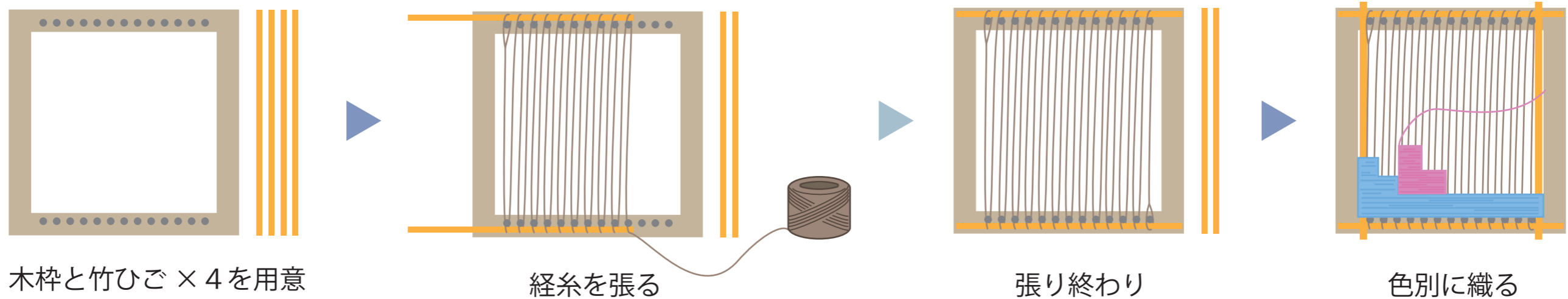
艶感や触り心地、織った際の目の粗さや厚みを重視し、綿と麻を選びました。

染料を調合・試染を繰り返して、色を調整してから本番用の糸20色分を染めました。



3. 織る

描いたイラストを正方形に分割し、30cm×30cmのパネルとして織っていきます。

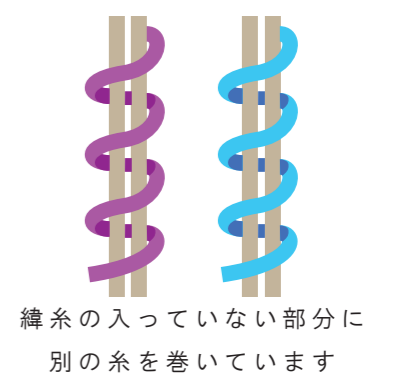


単純ながら気を配るところが多く、時間と根気の要る作業です。

また、5色パネルの背景部分には「**コイリング**」という手法を用いています。

隙間を開けることで展示空間との調和を図るとともに、

布の面白さを知ってもらおうきっかけになれば嬉しいです。



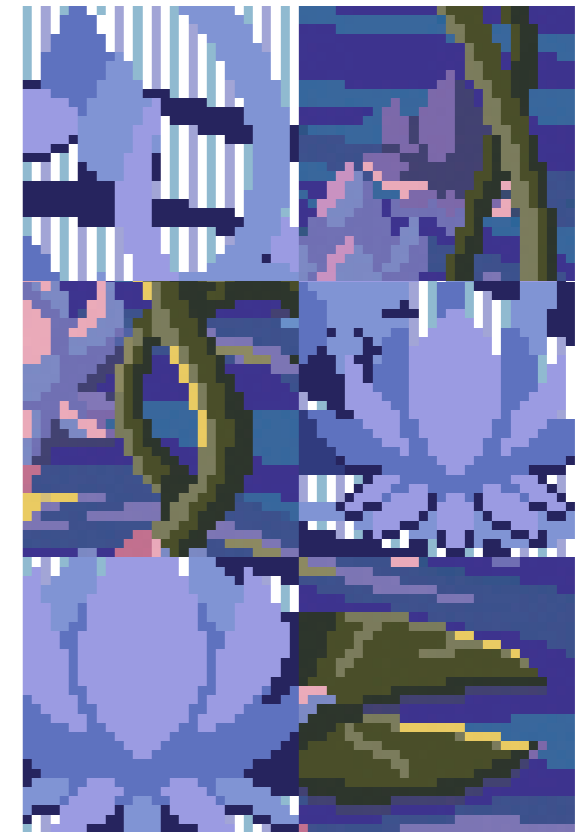
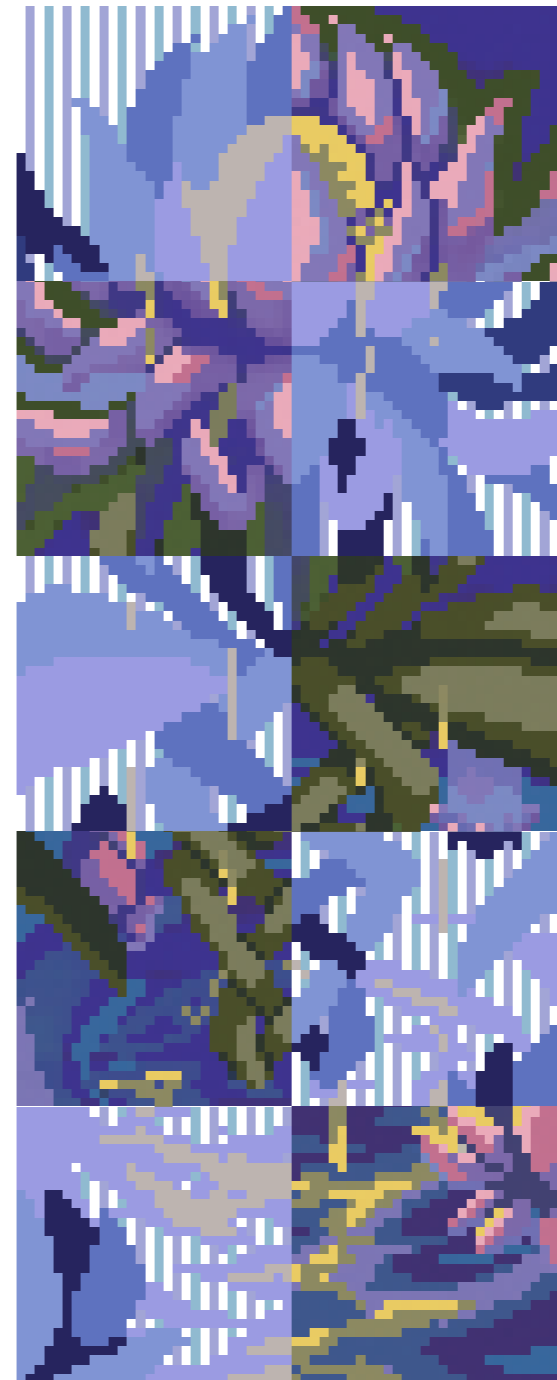
4. 組み立て / 手直し / 展示

組み立てたパネルを繋ぎ、穴の空いた柱状に組み立て吊るします。

■ 観賞の際に

立体として展示することで、絵に奥行きが生じたり、角度や時間帯の変化で光の当たり方が変わり、見え方や雰囲気が変わって見えてきます。

右にある元のイラストと実際の作品を比較しながら、ぜひ思い思いの見方で楽しんでみてください。



■ 制作を終えて

自分の好きな「織物」と「ドット絵」の新たな見せ方を模索しながら制作を初めた挑戦的な試みではありましたが、なんとか形にすることができました。

形、大きさ、組み方、色数、絵の細かさ、装飾、織の技法……。

工夫次第ではもっと面白い作品や製品が作れるかもしれないという可能性を感じました。

この経験を糧に、今後も独自のモノづくりを続けていきたいと思えます。